

 OTTO VON HABSBURG  
FOUNDATION  
BUDAPEST

# オットー・ハプスブルグ

1912年11月20日 -- 2011年7月4日

# その生涯 と遺産

# I. 皇位継承者



カーロイ皇太子とブルボン＝パルマ家のジータ妃殿下の第一子であるオットー・ハプスブルグは、1912年11月20日にオーストリアのニーダーエスタライヒ州ライヒェナウにあるヴァルトホルツ邸で生まれた。皇位継承者フランツ・フェルディナンドのサラエヴォでの暗殺、そして皇帝フランツ・ヨーゼフの死によって、皇位継承者となったオットー・ハプスブルグ皇太子のその後の運命は、定められる事となる。幼い子供であったオットーは、1916年12月30日ブダペストで行われた父カーロイ4世の戴冠式に参列した。

第1次世界大戦後のオーストリアでは、1919年4月3日に可決されたハプスブルグ法によって、ハプスブルグ家の復権は阻止された。カーロイ4世は2度にわたる復権を試みたが、1921年11月6日にはハンガリー王の地位も剥奪された。生涯の最後は家族と共にポルトガル領マデイラ島で亡命生活を送り、間もなく1922年4月1日に逝去した。葬儀の後、オットーの母親は、彼に「これからあなたは、自分の負う責任に相応しい生き方をしなさい。」と言い渡した。



写真：  
1912年、カーロイ4世、生まれて間もないオットー  
1917年当時のヴァルトホルツ邸  
1916年、カーロイ4世のブダ王宮地区での戴冠式  
親子孫の3世代、フランツ・ヨーゼフ皇帝、カーロイとオットー

「戴冠式は、確かに私に深い印象を残した。(…)恐らく、ハンガリーで行われた最後の大きな儀式の一つであった。そして、この戴冠式で国家の一体性が再び顕現したのだ。(…)戴冠式の間、私はずっとブルガリア王の隣にいたが、この王は頭でっかちの老人であったので、沢山のことを知っていて、全ての知識を私にひけらかしたかった。戴冠式の間、一つ一つの動作の象徴的な意味について哲学的講義を私に聞かせた。もちろん、全然私は理解できなかったの、とても退屈だったが、失礼のないように気配りをした。なぜなら、目上の人を常に尊重すべきだと教えられて来たからだ。」

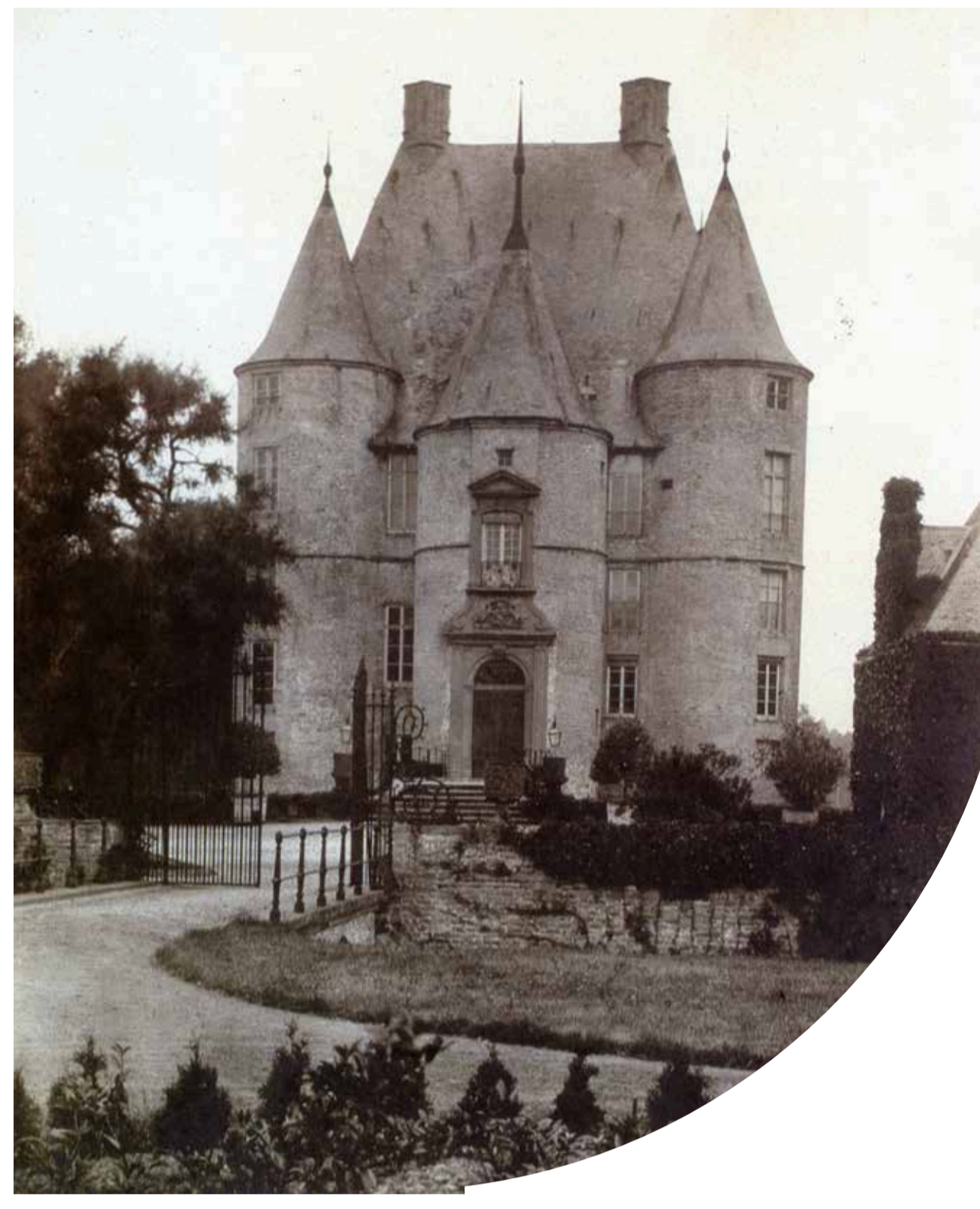
父のブダ王宮地区での戴冠式に関するオットー・ハプスブルグの思い出



## II. 欧州の子弟

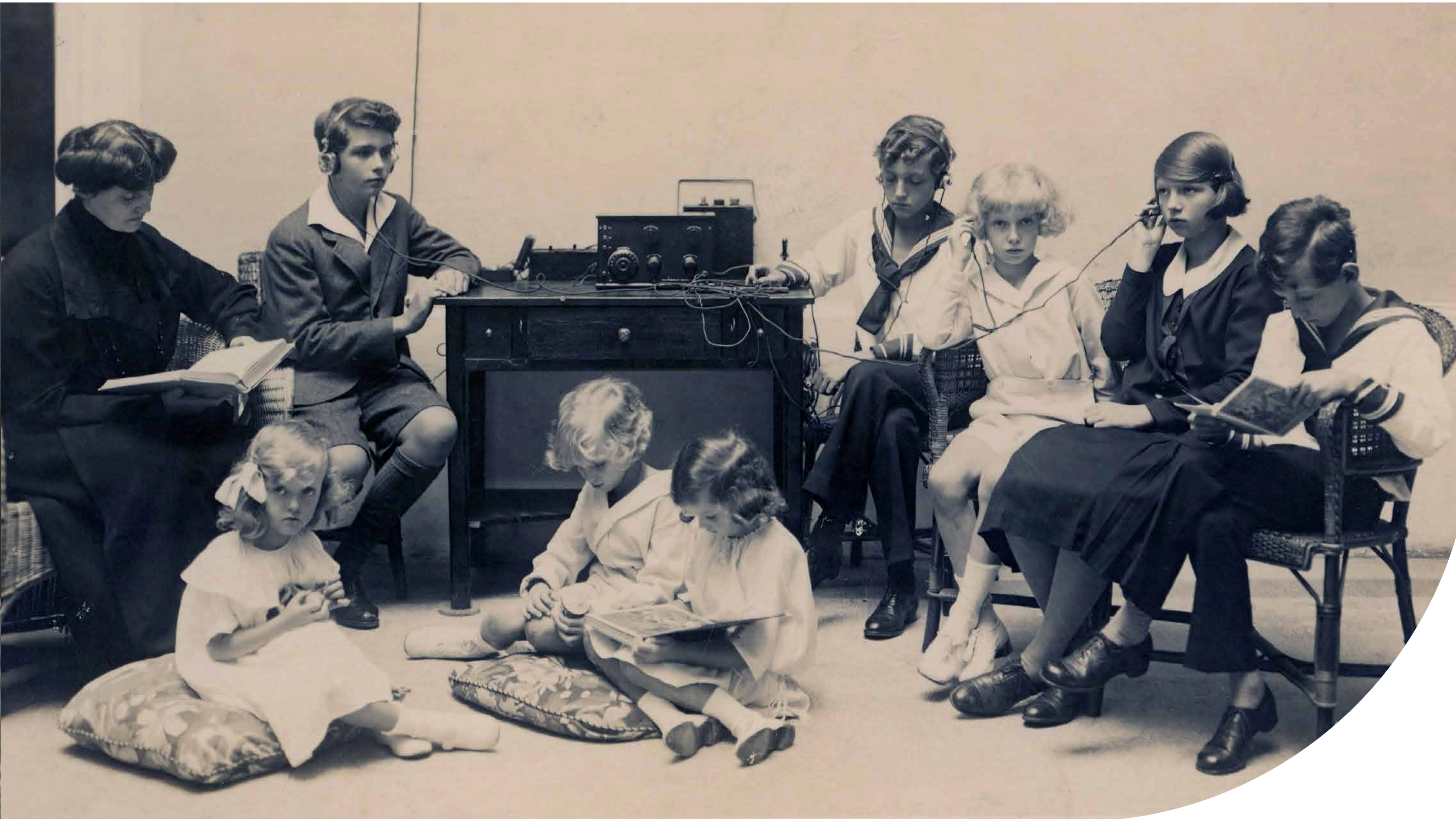


ハプスブルグ家の親戚であるスペイン王アルフォンソ13世の計らいで、オットーの一家は先ずマドリードのエル・パルド宮殿、その後バスク地方の小さな漁村であるレクエイティオ近くの城に移り住んだ。オットーの子供時代は、経済的にも厳しい状況であった。皇太子オットーは、スイス及びポルトガルで小学校での学業を開始し、やがてハンガリーのベネディクト派の修道士、オーストリア、英国およびフランスの教師達のサポートを受けながら、自習生となった。オットーは、皇位継承者として教育を受け、オーストリア及びハンガリーの大学入学資格試験に合格した。



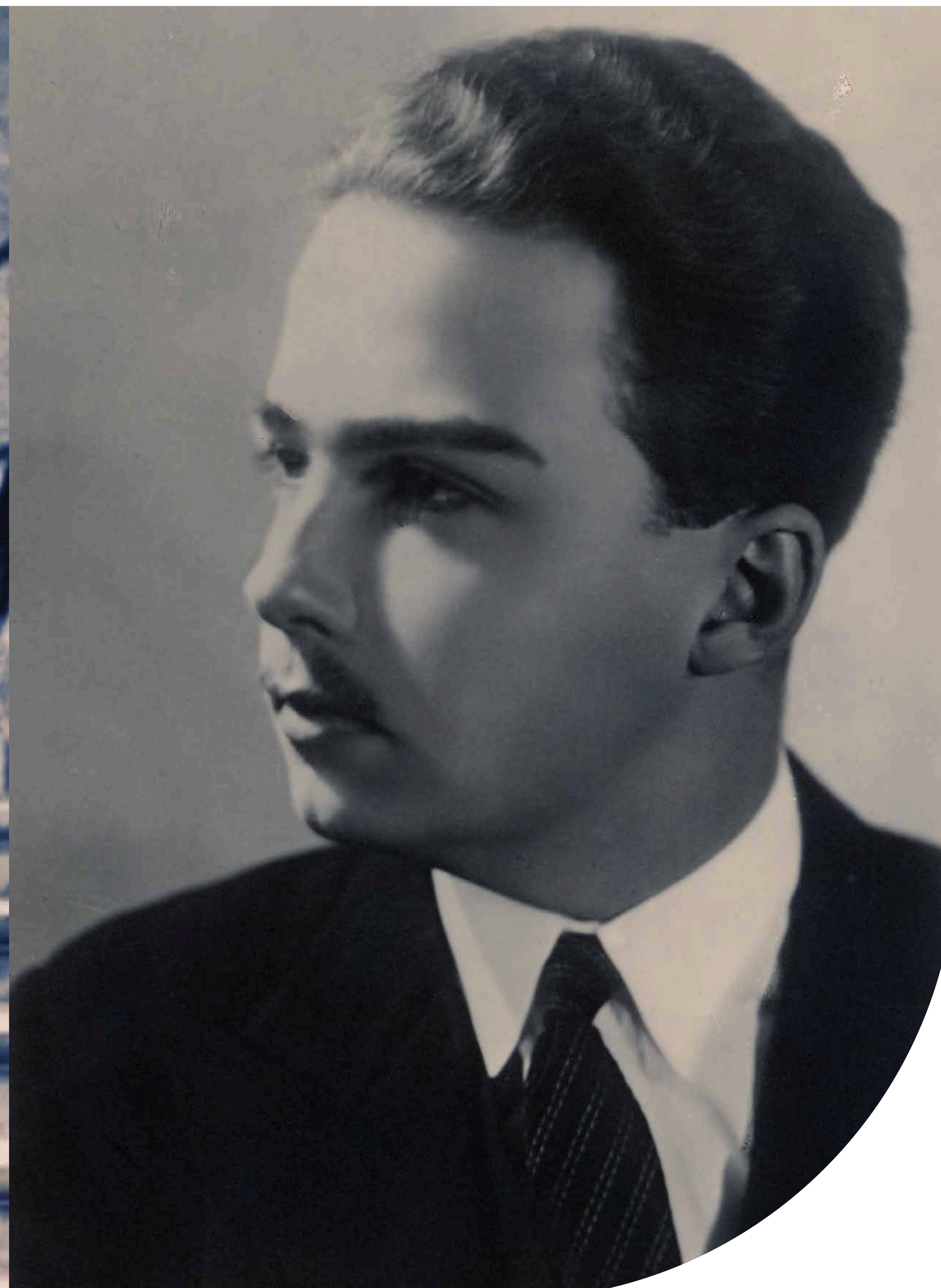
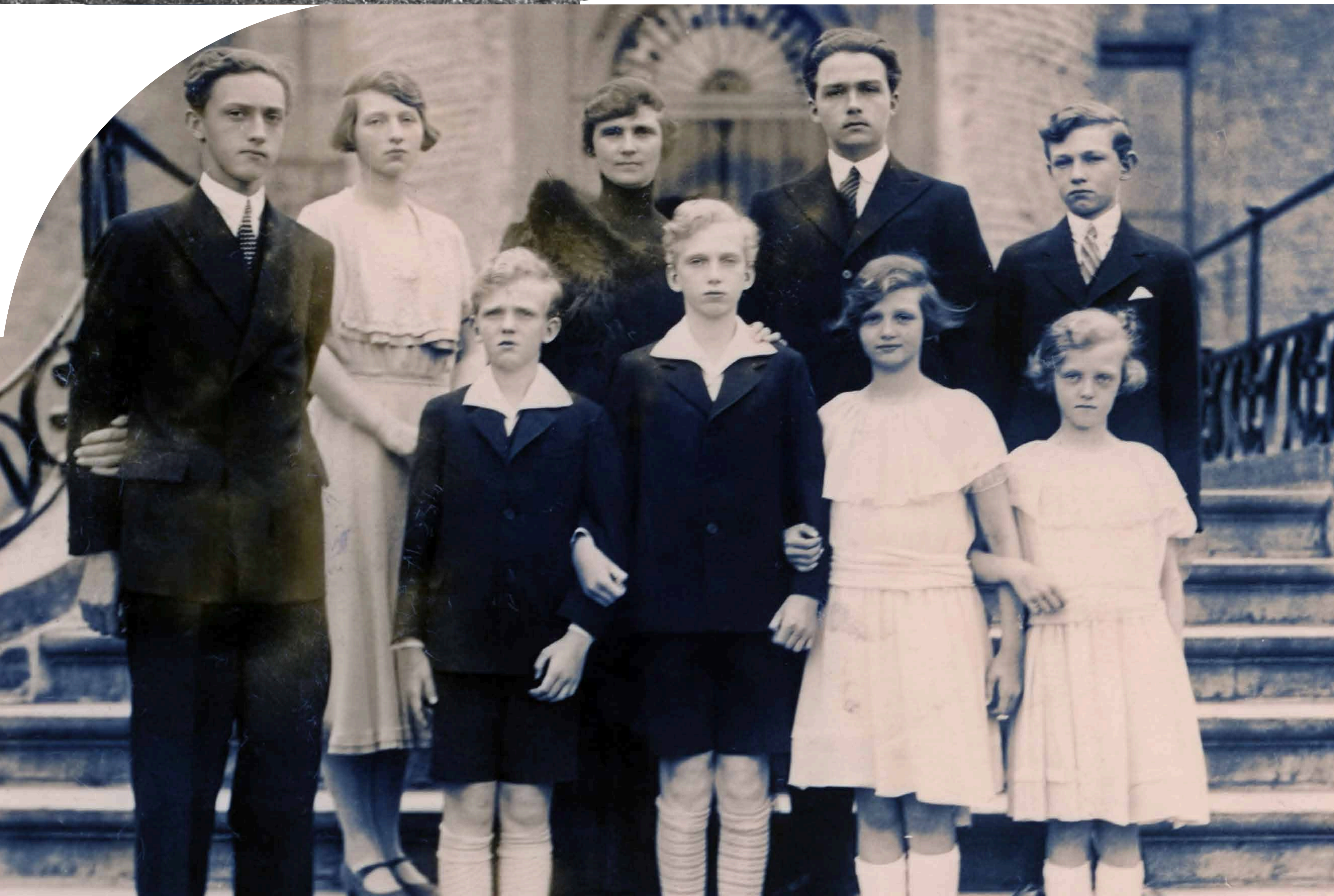
オットー一家は、1929年10月にベルギー首都近郊のステーンオッカーゼールにあるハムという名の城に移り住んだ。ここでは、村の鐘は、ハイドンの「神よ、皇帝フランツを守り給え」の旋律を奏でていた。オットーは、バール公爵の名でルーヴェン・カトリック大学に入学し、政治学及び社会学の博士号を1935年に取得した。まだ大学生であった皇太子オットーは、1933年ベルリンでドイツ帝国パウル・フォン・ヒンデンブルグ大統領と会談したが、その際ヒンデンブルグは、オーストリア及びハンガリーの勲章だけで着飾ってオットーを迎えた。しかし、オットーは、ヒトラーとの会談については2度にわたって拒否した。

写真：  
1920年代、車に乗って海岸で | 1923年以降、レクエイティオのウリバーレン城  
1920年代、オットーと家庭教師パウル・ジャームボキエ | 1930年代、ステーンオッカーゼールのハム城  
1928年頃、オットーと姉アデル | 1928年頃、家でラジオ放送を聴く一家  
1930年代、ジタ王妃の子供達とステーンオッカーゼールにて | 1930年代初頭、オットー・ハプスブルグの顔写真

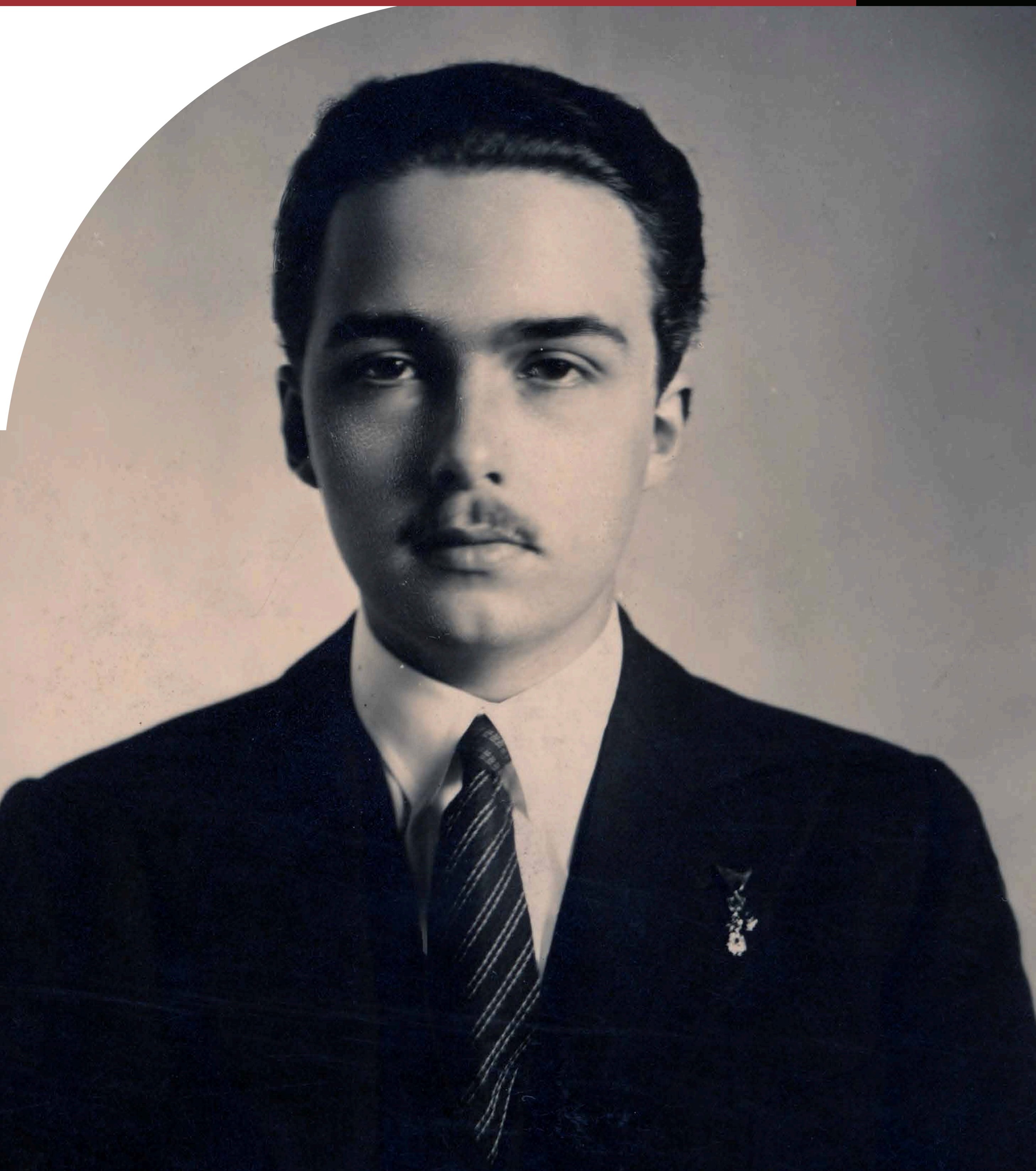


「ナチズムがどういうもので、どのようにして生まれるかを見てきた。それで先ず「我が闘争」を買って、かなりの勇気を出して、それを読了した。なぜなら、とても酷いドイツ語で書かれていて、文学に興味を持つものがこの本を読めば、きっと不愉快になるに違いないからだ。でも、私はいつも神に感謝して、この本を読み終えたが、全てが言い表されていたのだ。問題は、ヒトラーは全てを公然と述べていたのに、人々は信じたくなかったという点だ。私は、彼が何を言っているのかを知っていた。(…)他の西欧の政治家達がこの事を理解していない事には、いつも私は啞然としていた。(…)」

オットー・ハプスブルグ：ベルリンでの経験について



### III.「ハプスブルグという名は、如何なる状況であれ政治的使命感を意味した。」



オットー・ハプスブルグは、1930年11月20日に成人となり、これにより父の君主としての称号を継承した。しかし、学業終了までハプスブルグ家の政策は、母ジッタがこれを担ったが、ジッタは後々まで影響力を及ぼすことになった。オットーが後に表現したように、「母は、行動する前に、いつも私に相談してくれた。」のである。



ハプスブルグ家当主となった若きオットーと彼を支援する王政復古派の人々の関心は、1930年代後半以降オーストリアの独立保持問題が中心となった。エンゲルベルト・ドルフス首相は、これに関して以下のように述べている。「私は、王政復古主義者ではなく、オーストリアの愛国者だ。もし、君主制が我が国のために有益であると確信すれば、オーストリアは、近い将来ではなく、今すぐに君主国となるべきだ。」



国家社会主義者によって1934年夏にドルフスが暗殺された後、王制復古主義者であるクルト・フォン・シュシュニックが首相となった。1935年7月にハプスブルグ家一族の国外追放に関する法的条文が無効とされたが、シュシュニックは、「殿下」に対して、首相である彼との事前の合意なくしてオーストリアには帰還しないよう要請した。

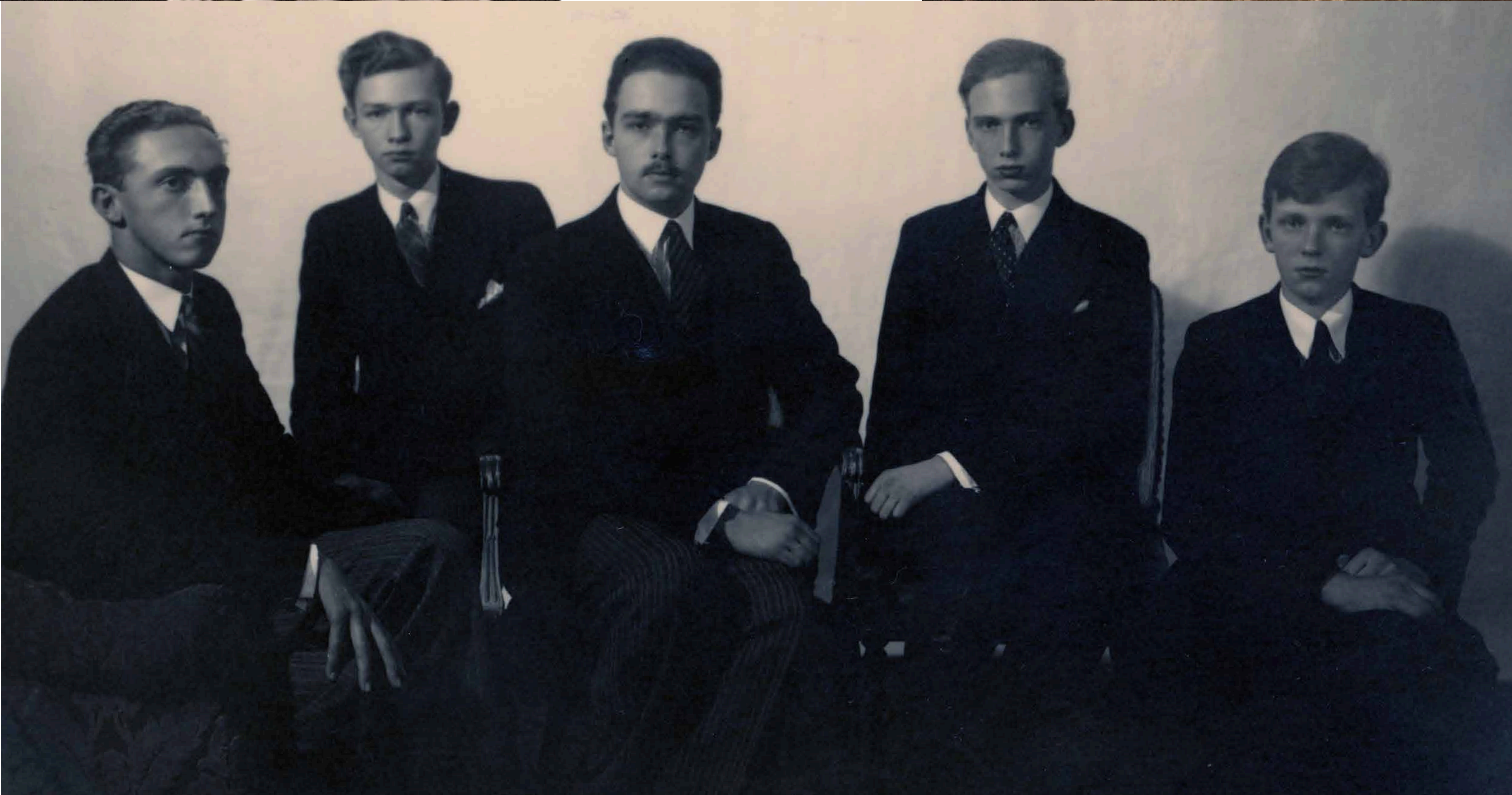


写真:  
1930年頃、オットー・ハプスブルグ  
エンゲルベルト・ドルフス首相  
1937年頃、軍服姿のオットー  
1930年代、ジッタ王妃と8人の兄弟と共に  
1937年頃、ハプスブルグ家の男性達  
1930年代末、家族旅行、ジッタ王妃と共に  
1937年頃、オットー・ハプスブルグ

「私にとって、ハプスブルグという名は、政治家一家であるという意味であった。何百年もの間、我々は政治の世界で生きて来た。この為、ハプスブルグという名は、如何なる状況であれ政治的な使命感を意味した。国家体制は、それ自体あまり大した意味を持たない。大事なのは、国家の内実であり、それに対して尽くさねばならない(…)。それ以外に、ご存知のように、私には子供達が、そして沢山の孫達もいる。来るべき世界で生きていく彼らのためにも、私は活動して行きたい。結局のところ、将来の世代のために働く事こそが私の使命なのだ。」

オットー・ハプスブルグ：一家の伝統について



## IV. オーストリア併合 (アンシュルス) あるいは王政復古



クルト・フォン・シュシュニック首相が、王政復古は現実的でないと考えていた一方で、オットーは、1937年新年の挨拶で、支持者に対して行動するよう呼びかけた。彼のモットーは、「撃たないことは、的を外す事とは同じではない」、つまりオーストリアの国家体制保持のためには、どのように小さな可能性にも賭けるべきという意味であった。

1938年2月のシュシュニックとヒトラー会談によって、ウィーンに対するドイツの圧力はより増大した。オットーは、この情勢を鑑みて、王政復古の考えを背後に押しやり、首相の職を譲るようシュシュニックに要求したが、彼はこの提案を拒否した。

ドイツ帝国へのオーストリア併合は、あらゆる王政復古の希望を打ち砕いた。ヒトラーのウィーンでの演説では、君主制支持者に対してオーストリアを新しい「偉大なドイツの未来へとつながる使命」と位置付けた。ドイツ国民と考えられたオットーに対しては、ナチスドイツに対する祖国の裏切り者であると見なして、指名手配が為行われた。1940年の命令によれば、オットーとその母は逮捕するのではなく、直ちに射殺されねばならないとあった。



写真:  
1936年、スイスにて、  
クルト・フォン・シュシュニック首相  
1937年、軍服姿のオットー  
1940年冬、ステーンオッカーゼールでの楽しいひと時  
1937年頃、ジータ王妃と8人の子供達  
1940年頃、ジータ王妃とオットー、アメリカにて



「国民と国家を守る為、最後まで全力を尽くす決意です。そして国民からの声と共にある事を確信しています。現状を考えると、列強諸国から承認を得るには長い手続きがかかるでしょう。貴方に対して (...) 君主制の復活をお願いする意思は全くありません。憲法を改正する事なく、新規の承認を経ることもなく、単に首相の座を譲るよう要求するだけです。 (...) そうすることで、我々は、君主制復活を形式的に行ったと同じような利益を得ることが出来るのです。」

シュシュニック首相に宛てたオットー・ハプスブルグの手紙

## V. 戦争と再出発



第二次世界大戦中、若きオットー・ハプスブルグは、外交上のコネクションを使って、何千人もの迫害された人々を救済した。アメリカでは、ルーズベルト大統領との関係構築を行い、反ナチの立場で数多くの講演を行なった。また、あらゆるフォーラムでオーストリア独立の立場を取った。1944年10月にヨーロッパに戻ったオットーだったが、連合国の反対及びハプスブルグ法の再施行の為、再度オーストリアを離れざるを得なかった。オットーは、次のように反応した。「いつも外国暮らしをせねばならないのは、人間の人生ではない。仮に、欧州人であるという自分の心情のため、ヨーロッパのどんな場所でも異邦人とは感じないとしても、やっぱりそう思う。」

1950年代には、共産主義に反対するハンガリーからの移民が結束できるよう気を配り、君主制復活を支持する人々の要請で、リスボンまで出向いて、年老いたマイクロシュ・ホルティと会談した。オットーは、ハンガリーでの出来事、政治的な公開裁判、そして1956年のハンガリー動乱(革命)のニュースなどを注意深くフォローしていた。

1951年5月、オットーは、フランスのナンシーにてザクセン＝マイニンゲン家出身のレギーナと結婚した。そして、1954年にはレギーナとオーバーバイエルン州のポェキングに移住した。結婚後、夫妻は7人の子供達に恵まれた。アンドレア、モニカ、ミカエラ、ガブリエラ、ヴァルブルガ、カーロイ、そしてジェルジェである。

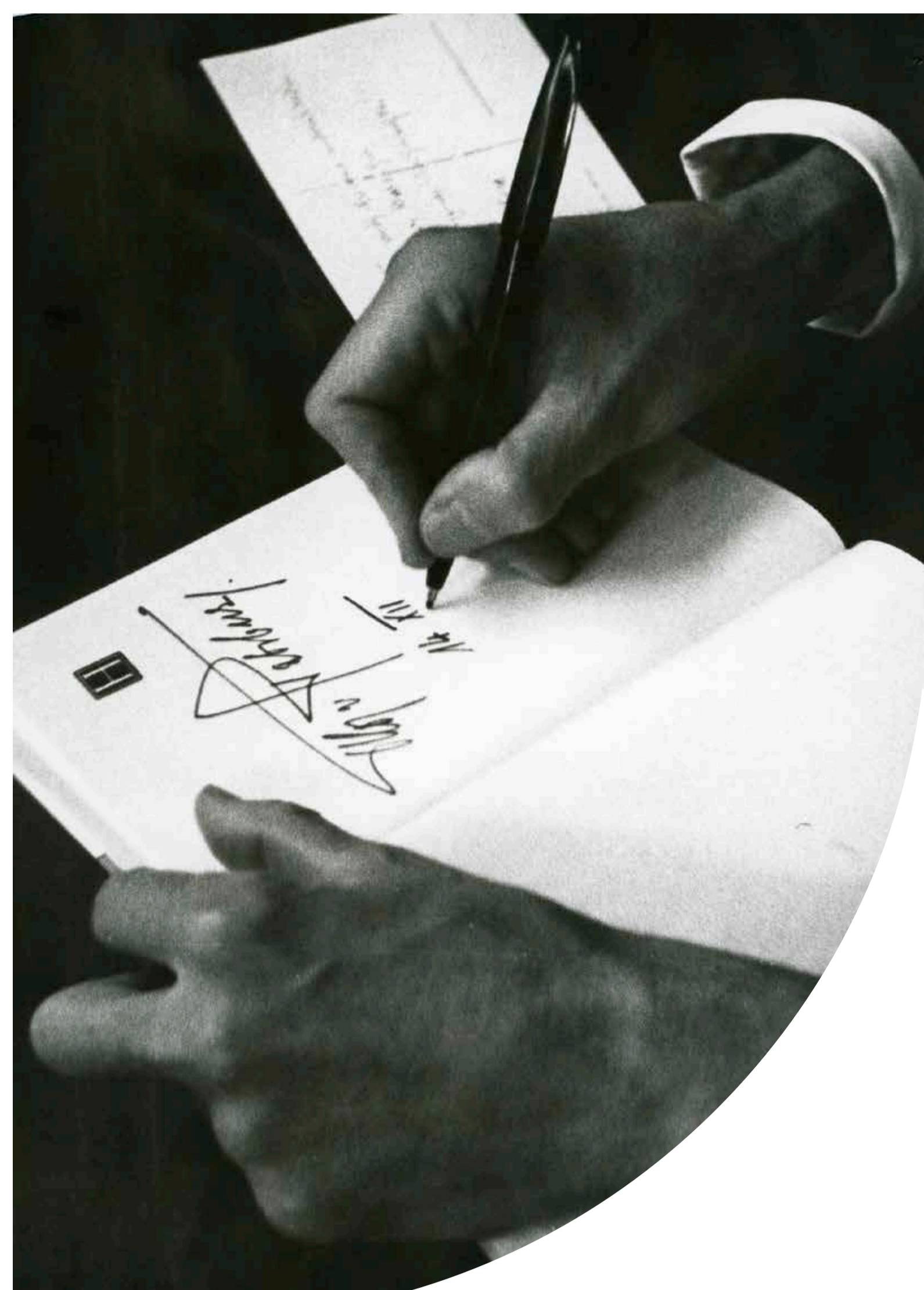


写真:  
1940年頃のオットー・ハプスブルグ  
1943年、家族と共に、ケベック州(カナダ)  
1951年、レギーナとオットーの結婚式、ナンシー(フランス)  
1950年代中頃、オットーと家族  
1953年、子供誕生後の幸せな夫妻

「私は、常に和解的であろうと努力し、過去に必ずしも望ましい態度を示さなかったような人たちとも握手をしてきた。一つの例を言おう。ご存知のように、私とマイクロシュ・ホルティの間には温かい友情関係はなかった。だが、ハンガリー人の外国移住について出来るだけ結束するのが国民の利益でもあると感じて、彼とは手を握った。同様に、1956年の出来事が起こると予見した時も、(…)誰とでも協力する必要があった。(…)それで、マイクロシュ・ホルティとも手を握ったのだ。そのためだけに。」

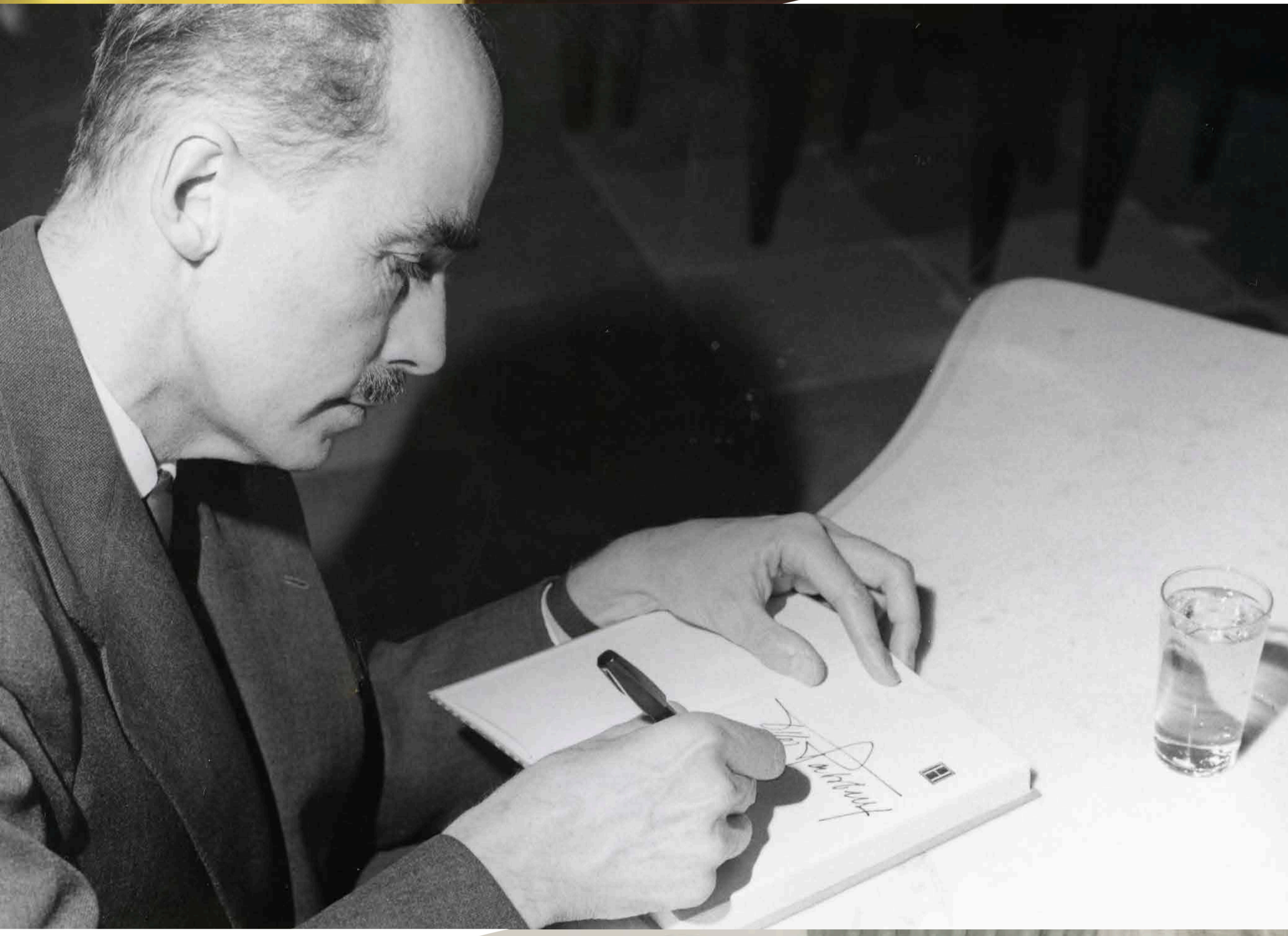
オットー・ハプスブルグ:  
マイクロシュ・ホルティとの関係について

## VI. 国家条約からハプスブルグ危機の解決まで



オットー皇太子は、1954年にオーストリア国籍を申請し、自分の氏名を正確に使用出来ることを望んだ。オットー・ハプスブルグ＝ロートリンゲンの名でオーストリア国籍が付与された後、オットーは、(1919年の法律の要件に従い)1961年5月31日に君主請求権を放棄し、さらに、ハプスブルグ家に帰属しないと宣言した。オットーは、長子カーロイ誕生の翌日、(自らの日記で書類と名付けた)「証書」に署名した。

5年以上に渡る政治的混乱の後、オットー・ハプスブルグは、最高行政裁判所の判決に基づきオーストリアのパスポートを取得した。そして、1966年10月31日、再び祖国オーストリアの地を踏んだ。そして、母であるジータ王妃は、オットーのあと15年以上も経って、やっと祖国へ入国できたのである。オットーは、後に次のように述べている。「脅迫はされたが、私の署名は、有効である。君主権の要求も、あるいは財産の請求も支持しない。」



1972年5月4日、オーストリア首相ブルーノ・クライスキーとオットー・ハプスブルグとの間で歴史的な握手が行われた。これ以外にも、オーストリア固有の歴史に対する関係の緩やかな変化は、2001年ジュザンヌ・リースーパッセル副首相兼外務大臣が、オーストリア共和国の権威を献身的に守ってきたオットーに対して、「皇帝閣下」と挨拶したことも、その表れである。

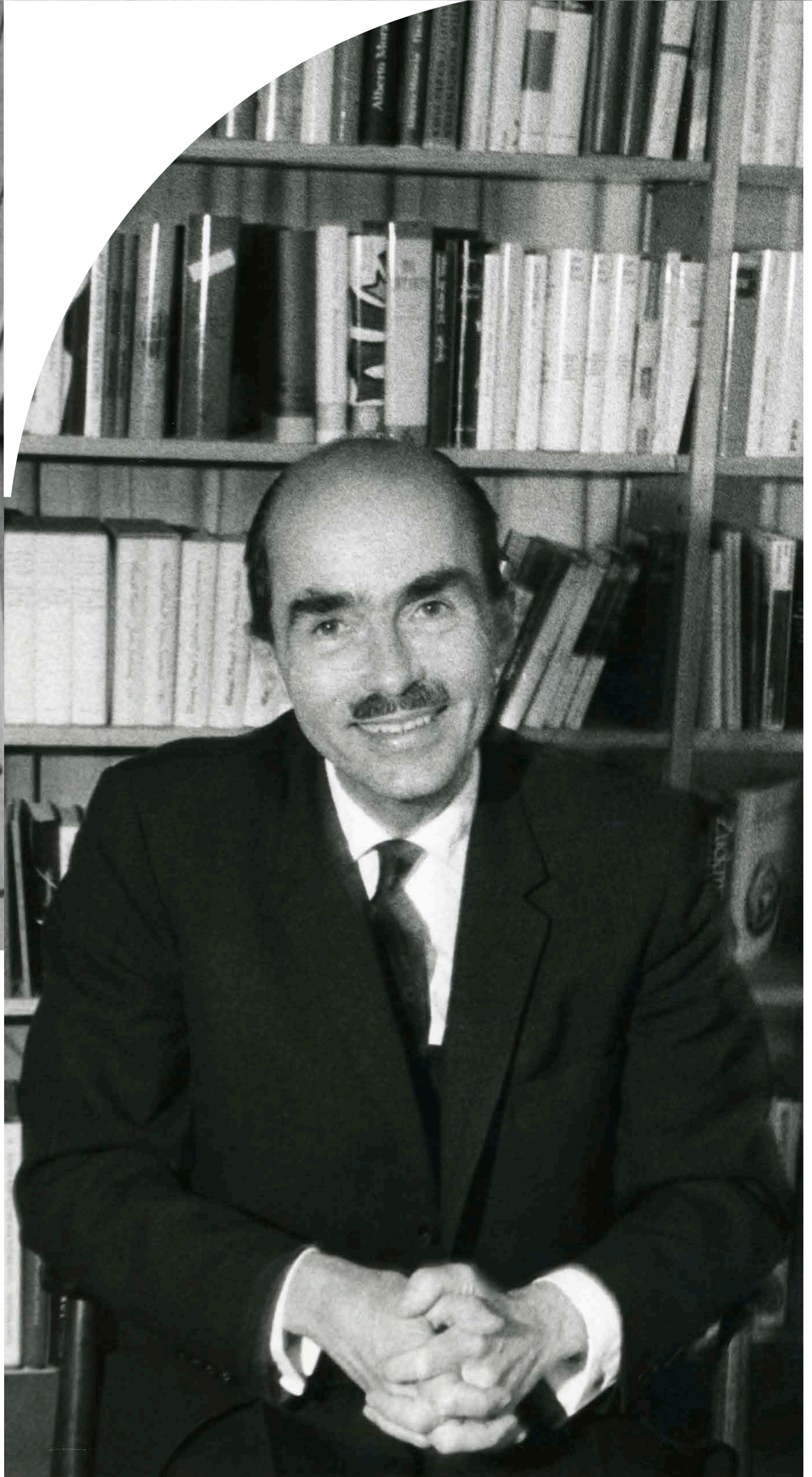
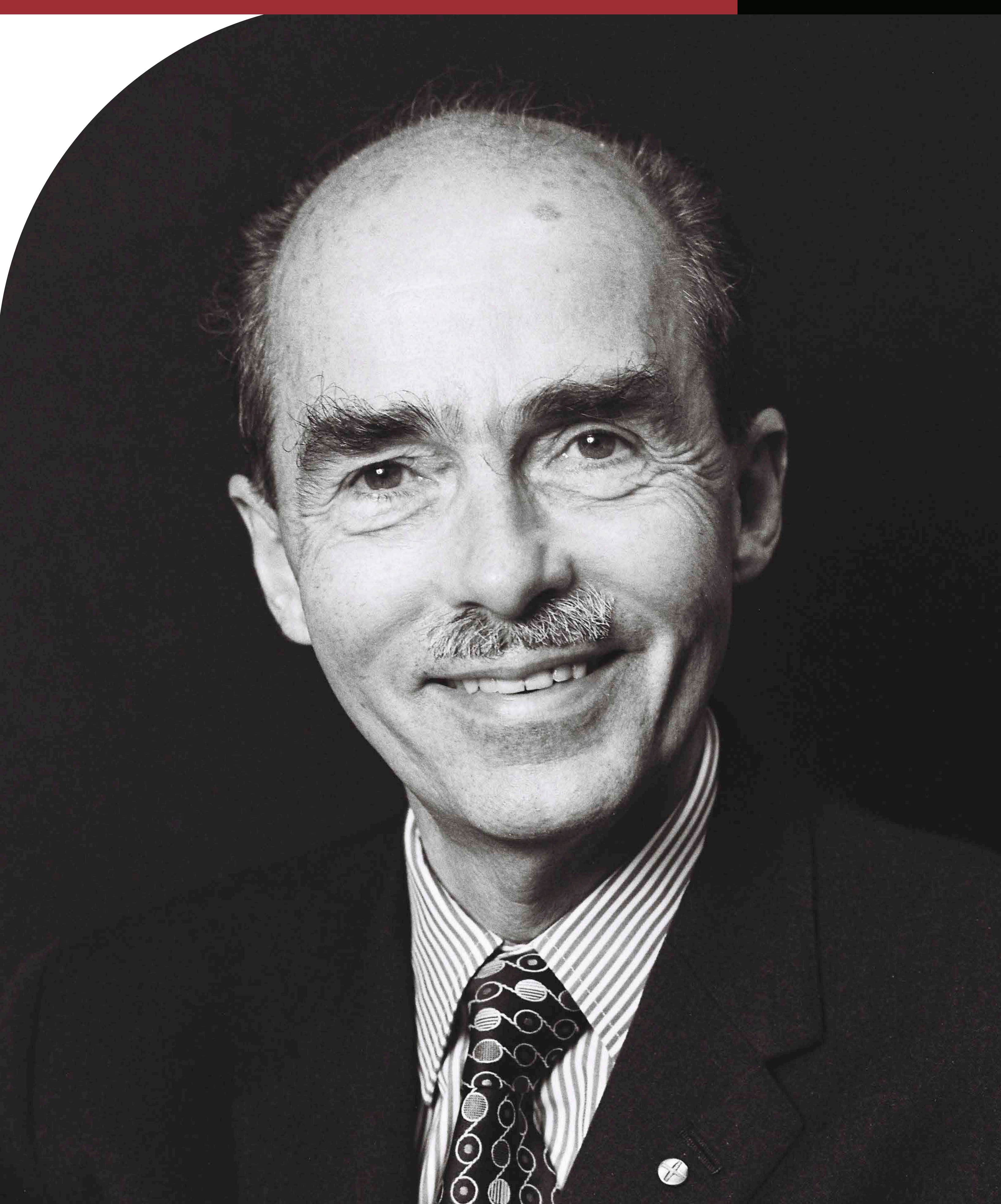


写真:  
1960年代、ミネアポリスにて  
1967年、新刊紹介、ミュンヘンにて  
1960年代、自著の献呈  
1960年代、アメリカ合衆国  
1966年、ザルツブルグにて  
1966年、ザルツブルグにて  
1967年、新刊紹介、ミュンヘンにて  
1968年、自著の献呈、ウィーンにて  
1969年、オーストリアにて

「署名のもと、以下の事を明瞭に宣言する。独逸同盟法第209条に規定された1919年4月3日法第2項に従い、ハプスブルグ＝ロートリンゲン家に帰属する事、及びこれに伴う君主権の要求を共に放棄する。私は、共和国に忠誠を誓う国民であると宣言する。」

オットー・ハプスブルグの放棄宣言





オットー・ハプスブルグは、1957年以降、自由、キリスト教、社会的統一へ向けたヨーロッパの為に活動する国際的組織、汎ヨーロッパ連合の副会長、その後1973年からは同組織の会長を務めた。1979年から1999年の期間、欧州議会ではバイエルン州キリスト教社会同盟（CSU）の議員として、欧州内外の安全保障確立のため、また中東欧民族の早期の欧州連合加入の為に尽力した。ストラスブールの欧州議会では欧州議会議員の前で何度もハンガリー語で発言した。

ハンガリーのカーダール共産主義体制は、こうしたオットーの活動を継続的に注視していたが、やっと1980年代後半になってオットーの名前はブラックリストから外された。ハンガリー領土には、70年を経た後1987年8月1日にやっと私人として入国できた。1989年2月には、欧州議会代表として最初の公式訪問を行った。オットー・ハプスブルグは、1989年8月19日に催された汎ヨーロッパ・ピクニックの後援者であったが、このピクニックが鉄のカーテン崩壊に重要な役割を果たしたのである。

1980年代末、オットーはハンガリー国籍を申請したが、これは最終的にはアンタル政権によって認められた。1989年秋、小地主党（FKgP）は、共和国大統領選挙の候補者としてオットーを推したが、彼はその提案を拒否した。2000年代になってもオットーは、政治的活動を続け、政府顧問、また講演者として、そして著作を通じて尊敬される公人であり続けた。



写真：  
1970年代、オットー・ハプスブルグ  
1981年、ストラスブールの欧州議会にて  
1979年、ストラスブールの欧州議会にて  
1981年、ストラスブールの欧州議会にて  
1980年代初頭、テレビのインタビュー  
1989年、ELTE大学の新生歓迎会にて、ブダペスト  
1989年、ドキュメンタリー映画「神のご意志で」のポスターの前で  
1980年代末

「私は、何よりも先ず欧州人である（…）。私は、アメリカ合衆国で欧州人となった。（…）何故なら、ギリシャ人とアイルランド人の間、ポルトガル人とデンマーク人の間の相違はより小さい。我々を団結させるのは、共通の欧州文化、共有する欧州の自由である。それ以来、私の祖国は欧州である。だが、私が他の国より心地良く感じる国々も存在する。これが、オーストリアとハンガリーである。特にハンガリー。私がハンガリーについて話す時には、祖国について語っているようである。」

オットー・ハプスブルグ：欧州および祖国愛について





最後のハンガリー王及びオーストリア皇帝の長子、政治家、評論家そして権威ある欧州指導者であるオットー・ハプスブルグは、2011年7月4日、オーストリアのポエキングで逝去した。彼の遺体は、ウィーンのカプツィーナ納骨堂に埋葬されたが、オットーの希望により彼の心臓は、ハンガリーのパンノンハルマ大修道院の地下教会に安置された。

オットー・ハプスブルグは、コンラッド・アデナウワー、ロベルト・シューマン、そしてアルチーデ・デ・ジャスパーリらの名前と結び付けられる欧州民族の多様性およびキリスト教文化に基づく理想的ヨーロッパの代表的人物であった。オットーの死に際して、欧州議会議長イェルジ・ブゼクは、その声明で「ヨーロッパの巨人」、欧州統合の指導的人物が逝去したと述べた。2011年、パンノンハルマでの式典で大修道院長アストリク・ヴァールセギは、次のように回想した。オットー・ハプスブルグは、敬虔なカトリック教徒として、欧州知識人の政治家として、「ハンガリー人の心を持つ素晴らしい人物として」、そして良き家庭人として生涯を全うした。

彼の知的遺産は、9ヶ国語で出版されたヨーロッパの歴史的、社会的そして政治的課題を扱う計37冊の著作であり、ハンガリーのオットー・ハプスブルグ財団が、敬意を以て管理している。

「死と直面することで、人は自分を欺かない。自分だけが残り、もう世俗の功績などはどうでも良くなる。人間の創造主が現れるとき、神の前では、職務の遂行と善良な意思だけが大事である。この教訓は、父の望んだように私の残りの人生で最も貴重な経験として残った。父の死によって、良心に曇りが無い限り、失敗は現実には有り得ない事が示された。」

オットー・ハプスブルグの父、カーロイ4世の生涯と死について



写真：  
汎ヨーロッパ連合のイベントにて  
1996年、乾杯の首領  
2000年代、自宅にて  
1990年代、ポートレート  
2011年、オットー・ハプスブルグの  
葬儀、ウィーン  
オットーの心臓を収めた慰霊碑  
、パンノンハルマ

展覧会実現へ協力された方々：デーカニイ・シルベステル、ファーコー・アールバード、フェエルディ・ゲルゲイ、フィジカル・ローベルト、プレーレ・ゲルゲイ、ヴァシュバーニアイ・フェレンツ、白石勝久

2024年